

トナーレスターテ2008年

結論



トナーレスターテでは、会話を発展させるために心の素朴さ、言い換えると清い心が必要だった。その態度は「謙遜」ともいう。それは相手に耳を傾け、問いかけ、表現する際にいつも必要であった。「謙遜とは、すべてのものに対する絶え間なく脈打つ奉仕の心だ。美しいものと醜いもの、良いものと悪いもの、生きているものと死んだものに」。

皆が本気で相手と話し合いたく、そして相手の相違点を受け入れようとした雰囲気の中で、様々な性格、ストーリーや人生観が出会えるための苦労と喜びを同時に味わったと思う。これこそが少なくとも最初の試みとしてのマルチカルチャリズムである。すなわち、本当に他者のアイデンティティーを尊重し、相手と対話をしたマルチカルチャリズムである。

わたしたちは話し合った。本気で普遍の真理を探す人々は、皆同じ価値があるものだ。同じ尊厳をもつ者なのだ。そしてどんな人間でも人間らしく生きるために他者を必要としなければならないとわたしたちは繰り返した。ゆえにわたしたちは互いに知り合い、話し合う必要がある。また、教育されることも必要だ。そして共通の善のために働くように互いに助け合い、学び合うべきである。

最後に、パネリストの話を通して、犯罪行為、国家と莫大な資源は密かに繋がっていることが分かった。この関連は、ますます貧しくなり跪かされている南の国々に対して、ますます豊かになっている北の多国籍会社による支配的な関係のためである。その支配の仕方は借金の構造的な暴力という大量破壊兵器のようなものだ。事実、そのシステムは、世界中に広がってきた軍事・金融の新・コロニアリズムの新たな形態における帝国主義、または新保守主義の論理に基づいている。

飢餓、疫病、戦争。これらは「死の天使」だ。「経済的な発展途上の」黙示録の死の天使なのだ。新しい犯罪組織と強い根回しは良心のとがめを感じずに市場を好き勝手に利用し、犯罪によってつくった金を再利用し、武器を売買する。これらは市場の法律的な上辺を利用し働く犯罪組織に他ならない。

これはホブズが言った「homo hominis lupus 人間は他人にとって狼である」という社会的雰囲気を作り、どんな時でも人々を、分裂させ、争い合い、互いにアイデンティティーを破壊し、相互理解を妨げる雰囲気である。つまり人々は殺し合うようにしている。

ではこのような状況に直面するためにどうしたらいいのか。

このような小さな文化イベントであるトナーレスターテは一つの方針しか使わない。そ

れは声を高く上げることである。道徳の立場からこのような状況を公然に非難し、公民として責任をもって働くことだ。トナーレスターテは声のない人々の声になりたい。

証人として話し、自分の経験を運んでくださったパネリストに深く感謝します。彼らはある国際組織の曖昧な活動を明らかにし、同時に無関心と怠惰に打ち勝ち、不正と闘うように刺激をくださいました。みなさん、ありがとうございました。

ポンテ・ディ・レーニョとヴェルミリオの市役所、そして支えてくださったミレッラホテルと他の協会の皆さんにも感謝します。エレナ始め、そしてスタッフと参加してくださった皆さんにお礼を申し上げます。

予算がそろい、そして神様のお望みなら、来年また会いましょう。

会長 マリア・パオラ・アツァーリ